

(論文)

大学生版自己肯定感尺度の作成

— カウンセリングの立場を重視して —

吉森丹衣子

キーワード

大学生 自己肯定感 質的調査 尺度作成 カウンセリング

研究 1

1-1. 問題と目的

自己に関する研究は年々増加の一途をたどっており(榎本, 2000), その中でも, 特に「自己肯定感」に関する研究が, 現在の学校教育現場において注目されており, 多くの研究者によって調査がなされている。

自己肯定感は, 学校生活における適応との関連性(松井・奈良井, 2001)や居場所との関連性(杉本・庄司, 2006. 斎藤, 2007), 対人関係(久芳・斉藤・小林, 2006)との関連性などについて指摘がなされている。そして, 岩永・柏木・藤岡・芝山・橋本(2007)は, 子どもの教育に関する問題事象の共通点の一つとして自己肯定感の低下を挙げ, 学校生活において子どもの自己肯定感を向上させることが重要であると結論付けている。

また, 川崎市・川崎市子どもの権利委員会(2008)の調査では, 自己肯定感の高低により友人間, 親子間での辛い体験の量に差があり, 低い子どもでは辛い体験に対する対処行動のレパートリーが少ないことが明らかにされている。また, 援助の必要性が指摘される自己肯定感の低い子どもが, 相談機関に対して不信感や警戒心などのネガティブなイメージを持っていることが明らかにされている。これは江角・庄司(2012)によっても指摘されており, 自己肯定感の高い子どもは, よくサポート「する」, 「される」立場にあることが指摘されている。

自己肯定感については調査だけではなく行政によっても注目されており, 文部科学省(2006)は「児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」を実施し, その際に研究課題の一つとして「生命を尊敬する心や自己肯定感をはぐくむ道徳教育」を設定している。さらに, 2007年に行われた文部科学省の中央教育審議会において, 「これからの学校教育で重視したいもの」の1つとして自己肯定感が挙げられ, 「他者との比較ではなく, 絶対的な自己肯定感を育てることが課題である」と述べられている。

また東京都教育委員会は, 「東京都教育ビジョン(第2次)」の中で, 「子供の自尊感情や自己肯定感を高めるための教育の充実」を推進計画に位置付け, 平成20年度から5か年計画で研究を進めている。このように自己肯定感は現在の学校教育の中で重要視されつつあり, 取り組むべき問題とし

て挙げられている。

以上の内容から、行政府、地方自治体、研究機関といった様々な領域で「自己肯定感」に関する研究が数多く行われており、児童期、思春期、青年期における精神発達において自己肯定感がキーワードとされていることが理解できる。しかし、自己肯定感の研究においては定義設定において問題点も指摘できる。Table. 1 は各研究によって設定された自己肯定感の定義である。

Table. 1 に示したように、自己を「認める」や「肯定する」と言った点では共通していると考えられる。しかし、自己肯定感の研究においては、3点の問題が指摘できる。①研究者によって自己肯定感の定義および下位概念には差異がある、②定義設定における背景についても詳細な説明がない、③自尊感情との明確な差別化が行われているか否かの説明がない、である。

③について、岩永ら（2007）は「自尊」を「自己肯定意識」と捉えることが適切と示唆している。また、田中・上地・市村（2003）は、星野（1970）、山本・松井・山城（1982）によって作成された自尊感情尺度には検討の余地があることを指摘しており、この研究を受け、後に星野（2000）は「respect」を「尊重」と訳すことを改善案として示している。このことから自尊感情と自己肯定感については弁別ではなく「訳語」としての問題も指摘してされている。

以上のことから、本研究では研究1として、定義設定の背景を明らかにしながら、調査データに基づく定義設定を行うことを目的とする。そのため、本研究においては、調査対象を、ある程度確立した自己像を持つと推測される大学生と定め、「自己肯定感」という言葉を一般大学生がどのような概念として理解、把握しているかを調査し、調査結果をKJ法によって分析することで自己肯定感を構成する諸要素を把握する。

Table. 1 先行研究における自己肯定感の定義

研究者	定義
平石（1990）	・ 自己への態度の望ましさ ※ 自尊心の下位概念として設定
樋口・松浦（2002a）	・ 現在の自分を自分であると認める感覚 （下位概念：諦観・帰属・独立の3つの概念により構成されると仮定）
樋口・松浦（2002b）	・ 現在の自分を自分であると認める感覚 （下位概念：自律・自信・信頼・過去）
高垣（2004）	・ 自分自身のあり方を肯定する気持ちであり、自分のことを好きである気持ち
田中（2005） 田中（2008）	・ 自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情 ・ 自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情 ※ 自尊心の下位概念として設定
2 多田ら（2007）	・ 「自分自身のことが好き（自己受容）」、「自分自身を大切にしている（自己尊重）」、「生まれてきてよかった（自分の命に対する受容）」を合わせたもの
久芳ら（2007）	・ 自分自身のあり方を概して肯定する気持ち （理想自己と現実自己のずれをうまく調節しながら、ありのままの自己を受け入れるという自己受容性とは区別する）
江角・庄司（2012）	・ 自己の価値基準を基にした、よいもダメも含め自分は自分であって大丈夫という感覚

1-2. 方法

本調査では「自己肯定感」について自由記述法による質問紙調査を行った。質問項目は①自己肯定感とはどういったものだと思いますか、②あなたは自己肯定感が高い方だと思いますか、低い方だと思いますか、③高いまたは低いと答えた理由はなんですか、の3項目である。調査は授業時間内に行われ、質問紙は全員が回答し終えたことを確認して回収した。

1-2-1. 調査協力者

調査協力者は都内の大学に通う大学生男女25名を対象に調査を行った。

1-2-2. 分析方法

自由記述によって得られたデータはKJ法(川喜多, 1996)に基づいて分析された。分析の手順は下記の手順により、専門家3名によって分析された。なお、今回のKJ法の分析にあたっては、その目的が自己肯定感の諸要因を知り、定義を定めることであるため、類似したグループの合成は最小限にとどめた。

〈手順〉

- I. カード作り：自由記述によって得られたデータを意味内容によって区切り、区切られた内容毎にカードを作成した。
- II. カード集め：作成されたカードを同じ意味内容を示すもの同士で集め、小グループを編成した後に、各グループの示す内容が更にまとめられるものであった場合には、グループ同士の合成を行った。
- III. 表札作り：作成されたグループに、グループを最も適切に表す名前をつけた。

1-3. 結果

分析の結果、調査協力者の回答からデータとして48枚のカードが得られた。それらのカードを分析した結果、4つのカテゴリーが自己肯定感の諸要素として得られた。その結果をTable. 2に示す。

Table. 2 生成された自己肯定感諸要素

表札名	記述された内容
存在の肯定	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の存在を肯定するもの ・自分の存在を自分で認められていること ・自分を肯定する感覚
安定した自己	<ul style="list-style-type: none"> ・あまり周りを気にせずに、自分は自分だと思えることができるから ・自分は自分、人は人と思えるから ・自分の考えかたや行動が他者と異なっても自分は正しいと肯定できるから
自信	<ul style="list-style-type: none"> ・自分に自信がある ・どんなときでも自分は苦難を乗り越えていけるといった、根拠はないけど、自信を持つてるから ・自分のやることに心配はあるけど、なんとかなるだろうと思えるから
受容	<ul style="list-style-type: none"> ・ありのままの自分を許せる気持ち ・自分を許せる ・自分の生き方や性格などを納得して認めていること

調査の結果、自己肯定感の要素として「存在の肯定」、「安定した自己」、「自信」、「受容」が抽出された。「存在の肯定」では、自分自身の存在を認めるといった内容が分類され、「安定した自己」では他者に振り回されることのない自己、他者と適切な距離をおいて存在できる自己を示す内容が分類された。また、「自信」には、自分自身に対して自信を持っている人間が自己肯定感を有しているといった内容が分類され、「受容」には自分自身を受容できているといった内容が分類された。

1-4. 考察

1-4-1. カテゴリーの分析

調査によって得られた自己肯定感に対する自由記述を、KJ法によって分析した結果、大学生の自己肯定感に対する理解が大きく4つの要素から成り立っていることが今回の調査から示された。

調査によって得られた「存在の肯定」には、自分の存在を認める、または肯定するといった内容が集められた。Table. 1に示された多田ら(2007)の自己肯定感の定義設定において「自分の命に対する受容」があげられていることから、今回の調査で得られた「存在」という記述の背景にも、「自己の生命、生存そのものを肯定する」という内容を示唆していると考えられる。

「自信」のカテゴリーに分類された内容はただ単に「自信を持っている」というものから、自身の行動に対して不安は伴うが、最終的に達成できるという個人内での確信が示されている。そのため、後者はBandura(1977)によって提唱された自己効力感の概念に相当するものと考えられる。

「安定した自己」は、他者に振り回されない自己像と捉えることができる。今回の自由記述によって得られた回答は他者の基準・評価ではなく、自己の基準に照らし合わせて自己を評価・維持するといった内容が示されていることから、Rogers(1961)が人間の生成過程において現れるとした「評価の源泉が自己の内部にあると感じる」という状態像と類似していると考えられる。

「受容」においては、「自分を許す」という表現が多く示された。この「許す」という表現からは、自分自身の短所や不足部分に対する態度として捉えることもでき、このような点は、これまで自己概念研究において、理想自己と現実自己の観点から研究が行われてきたと考えられる。

理想自己、現実自己はRogers&Dymond(1954)によって臨床場面において提唱された概念であり、両者の不一致の大きさが不適応の指標として示されてきたが、Suzan(1996)によれば、この理想自己と現実自己はWilliam James(1894)によって提唱された自尊感情の定義である「願望における成功の割合」という概念と密接に結びつくものとされている。以上のことから、今回の自己肯定感の諸要素として得られた「受容」においては、Rogers(1951)、Rogers&Dymond(1954)の提唱した理想自己と現実自己の不一致および、現実自己を受け入れることと解釈することが可能と推察される。

1-4-2. 定義設定

研究1の結果から、自己肯定感の概念に対する一般大学生の認識の内容が得られ、その結果、自己肯定感に対しては4つの下位概念が示された。それらを踏まえ、本研究において自己肯定感の定義を以下のように設定した。

『自己肯定感とは、個人が自分自身を評価した際に、自己の短所や不満足な点を受容した上で全体的自己像を肯定的なものとして捉える感覚である。また、自己肯定感は、自分の行動や自分自身に対して自信を持ち、他者の評価に左右されない自己像の知覚によって構成される概念である』

Table. 1に示された先行研究における自己肯定感の定義と、今回設定された自己肯定感の定義とを比較した際、「自己を肯定的にみる」という点では先行研究同様に共通するものであり、

Baumeister (1998) の「自分自身による自己への肯定的評価」という自尊感情に対する定義とも共通すると考えられる。

本研究での自己肯定感の定義では自己の内的基準を基にするという点で Rosenberg (1965) と共通すると考えられるが、「他者の評価に左右されない自己を保つ」という点には重要な差異があると考えられる。Rosenberg (1965) は、評価を他者との相互間によるものと、個人内におけるものと 2 つに分けたが、今回の調査から自己肯定感、他者の評価や社会的評価、比較を踏まえた上で個人の中での自己評価を保つというものであるため、「とてもよい (very good)」と「これでよい (good enough)」の両者を包含するものであると捉えられる点で異なっていると考えられる。

上記に示されたように、今回の調査で得られた自己肯定感の定義は、これまでの自尊感情及び自己肯定感研究における定義とは異なっており、今回の調査においてデータに基づいた独自の定義が得られたと考えられる。

研究 2

2-1. 問題と目的

本研究では、研究 1 で得られた自己肯定感の定義をもとに、量的検討によって自己肯定感の因子構造の検証を行うことを目的とする。

2-2. 方法

2-2-1. 予備調査

2-2-1-1. 質問項目作成

質問項目の作成においては、研究 1 で得られた自己肯定感の仮説的定義および構成要素をもとに、この分野に関係する専門家 5 名 (臨床心理士 1 名、大学院生 4 名) によって検討が行われた。項目には、研究 1 で得られた自由記述の表記をできるだけ取り入れるように配慮された。結果、研究 1 で得られた自己肯定感の各構成要素につき 3 項目、合計 12 項目からなる質問紙を作成した。この尺度は、「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの 5 件法により得点化された。

2-2-1-2. 調査協力者と手続き

2009 年 7 月、私立大学の大学生 203 名 (男性 72 名、女性 131 名。平均年齢 19.47 歳 $SD=1.06$) に対して 12 項目の質問紙を使って予備調査を行った。この予備調査は授業時間内を使用して実施された。質問紙の回収は回答が終わった者から順次提出する形式とした。

2-3. 結果

2-3-1. 因子構造の検討

12 項目に対して天井効果と床効果を検討した。その結果、項目 5 において床効果が見られたため項目 5 を削除し、残り 11 項目に対して主因子法による因子分析を行った。算出された分析結果から、因子数を 1 因子と判断し、因子負荷量が .40 を下回る項目を削除することとした。その結果、項目 2、4 が削除され、最終的に全 9 項目が選択された。Table. 3 に因子負荷量の結果を示す。

5

Table. 3 大学生版自己肯定感尺度（仮）の予備調査因子負荷量

質問項目	因子負荷量	共通性
問 11 私は、不安なことがあっても、最後には「なんとかなる」と思える。	.711	.506
問 3 私は、自分なら大丈夫と思えることがよくある。	.694	.482
問 8 私は、特に理由がなくても自分に自信をもてることがよくある。	.694	.481
問 7 他者に否定的な評価をされても、最後には「まあいいか」と思える。	.632	.400
問 10 私は特別何かをしなくても存在価値がある。	.619	.383
問 6 私は、いつも、自分の短所をあまり気にしない。	.608	.369
問 1 私は、いつも自分を否定的に見てしまう。	-.598	.357
問 9 私は、今の自分が「理想とする自分」と違ってとも認めることができる。	.502	.252
問 12 私は親しい人という時、自分はその場にいても良いといつも感じる。	.500	.205

2-3-2. 信頼性の検討

今回の調査によって作成された「大学生版自己肯定感尺度（仮）」の信頼性についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、 α 係数は.843であり、本尺度は十分な信頼性を備えていることが示された。

2-4. 考 察

本調査目的は、因子分析を用いることによって大学生版自己肯定感尺度の予備的な因子構造を知り、信頼性を検討することであった。その結果、9項目1因子構造が確認された。信頼性に関してはChronbachの α 係数による検討の結果、先行研究同等の信頼性が確認され、以上の結果から大学生における自己肯定感尺度の作成が可能であることが示唆された。今回の調査においては妥当性の検討が行われていないため、今回の結果を精査し、本調査においては妥当性の検討を行う必要性が指摘される。

3-1. 本調査

3-1-1. 質問項目の作成

本調査では、予備調査で削除された項目2, 4を修正した上で追加し、合計11項目からなる質問紙を作成した。予備調査で削除された項目5については、床効果が見られたため、内容的に不適切と考え本調査では追加しないものとした。

6

3-1-2. 調査協力者

関東圏の大学3校、関西圏の大学1校に在学する大学生540名（男性242名、女性298名）である。平均年齢は19.99歳（SD=1.12）であった。

3-1-3. 使用した尺度

本調査では、基準関連妥当性を検討するために樋口、松浦（2002）による「自己肯定感尺度」と

山本・松井・山城（1982）による「自尊感情尺度」を同時に配布した。各尺度の詳細は下記の通りである。

①自己肯定感尺度（樋口・松浦，2002）

樋口・松浦（2002）によって作成，標準化された尺度であり，20項目（4因子構造）で構成されている。回答は「あてはまる」から「あてはまらない」までの5段階評価が用いられている。

②自尊感情尺度（山本・松井・山城，1982）

山本ら（1982）によって翻訳された，標準化されたRosenberg（1965）の自尊感情尺度であり，10項目（1因子構造）からなる質問に対し，「あてはまる」から「あてはまらない」までの5件法による回答が求められる。

なお，質問紙の配布に際しては，カウンターバランスを考慮し，質問紙の順序が異なる3パターンの質問紙を作成し，配布した。

3-1-4. 調査手続き

調査は，各校の授業時間内に配布，回収され，回答は無記名で行われた。実施に際しては①調査は授業成績と無関係であること，②結果は統計的に処理されることの2点を教示した。調査時期は2010年の10月から2012年11月にかけて行われた。

3-2. 結果

3-2-1. 因子構造の検討

全11項目の天井効果と床効果の有無を分析したが，該当する項目は得られなかった。そのため11項目に対して主因子法による因子分析を行った結果，因子数は固有値およびスクリープロットから2因子とし判断された。次に，因子負荷量.40以上を基準にプロマックス回転による因子分析を行った結果，2項目が削除され9項目からなる自己肯定感尺度が完成した（累積寄与率 37.53%）。以上の結果をTable. 3に示す。

Table. 3 因子分析結果

項目	因子1	因子2	共通性
項目10 私は、不安なことがあっても、最後には「なんとかなる」と思える。	.639	.065	.454
項目9 私は特別何かしなくても存在価値がある。	.614	-.081	.335
項目8 私は、今の自分が「理想とする自分」と違って認めることができる。	.581	-.010	.333
項目7 私は、特に理由がなくても自分に自信が持てることがある。	.545	.146	.396
項目11 私は親しい人という時、自分はその場においても良いといつも感じる。	.494	-.065	.217
項目4 私は、あまり他人の評価を気にしない。	-.190	.870	.631
項目2 私は、あまり他者の意見に左右されない。	.004	.547	.301
項目5 私は、いつも自分の短所をあまり気にしない。	.119	.522	.347
項目6 他者に否定的な評価をされても、最後には「まあいいか」と思える。	.229	.457	.364
因子相関		.491	

第一因子は「私は、不安なことがあっても、最後には『なんとかなる』と思える」、
「私は特別何かをしなくても存在価値がある」などに因子負荷量が高いことから「無条件の自己肯定」と名付けられた。

それに対し、第二因子は「私は、あまり他人の評価を気にしない」、
「私はあまり他者の意見に左右されない」、
「私は、いつも自分の短所をあまり気にしない」という項目で構成されていることから、「安定した自己」と名付けられた。

3-2-2. 信頼性の検討

3-2-2-1. α 係数による検討

本研究で作成された自己肯定感尺度の信頼性についてCronbachの α 係数を算出した。その結果、 $\alpha = .767$ であった。以上の結果から、本研究によって作成された自己肯定感尺度は、ある程度の信頼性を備えていると判断される。

3-2-2-2. 再検査法による検討

3-2-2-2-1. 調査協力者および手続き

調査は都内私立大学2校で行われ、2回の調査の結果53名（男性21名、女性32名、平均年齢20.01歳 $SD = .820$ ）からデータを得た。実施に際しては1回目の調査から約1ヶ月の期間をおいて2回目の調査を実施した。質問紙は授業時間内に実施、回収された。

3-2-2-2-2. 結果

再検査法を実施し、相関係数を算出した結果、1度目と2度目の得点間において $r = .701$ ($p < .01$)と優位な相関が示された。そのため、本尺度は十分な信頼性を備えていると考えられる。

3-2-3. 妥当性の検討

本研究では基準関連妥当性を検討するために松本・山城（1982）による自尊感情尺度と、樋口・松浦（2002）による自己肯定感との妥当性係数が検討された。その結果、松本・山城（1982）によって作成された自尊感情測定尺度との妥当性係数は $.562$ ($p < .01$)であった。次に、樋口ら（2002）との妥当性係数は $.521$ ($p < .01$)であった。その結果をTable. 4に示す。Table. 4の結果から、本尺度は十分な基準関連妥当性が満たされたと考えられる。

Table. 4

	自尊感情測定尺度	自己肯定感尺度
自己肯定感尺度	.562	.521

8

** $p < .01$

3-3. 考察

3-3-1. 因子構造の検討

本調査で得られたデータを分析した結果、予備調査とは異なり2因子構造による自己肯定感尺度が得られた。新しく得られた第二因子には、予備調査で削除され、本調査で内容を修正して取り入

れられた項目 2, 4 が含まれている。以上から、本調査において追加された 2 項目が、自己肯定感を適切に表現する内容に変化したために、第二因子として構造化されたと推察される。

3-3-2. 自己肯定感尺度の信頼性と妥当性

本研究で作成された大学生版自己肯定感尺度は、 α 係数が $\alpha = .767$ であり、従来の自己肯定感尺度が $\alpha = .800$ であること（平石, 1990. 田中, 1999, 2008）から、信頼性においてやや低い値を示している。しかし、再検査法による信頼性の検討は、これまでの自己肯定感尺度の作成においては実施されてこなかったが、本研究においては再検査法による信頼性の検討を実施した結果、 $r = .701$ ($p < .01$) と有意な正の相関が得られた。

以上のことから、本研究によって作成された大学生版自己肯定感尺度は、ある程度の信頼性を備えた尺度であることがわかる。また、これまでの尺度作成において実施されてこなかった再検査法による信頼性の検討を実施し、有意な正の相関が得られた点に意義がある。しかし、 α 係数が先行研究よりも下回る結果となったから、今後より信頼性を兼ね備えた大学生版自己肯定感尺度の作成が求められる。

妥当性においては、基準関連妥当性で十分な水準を満たす値が得られた。平石（1990）においては基準関連妥当性の検討が行われておらず、田中（2008）では自尊感情尺度と $r = .750$ ($p < .01$) と強い相関が得られており、自尊感情尺度との弁別性において基準関連妥当性の問題が指摘できる。以上のことから、本尺度は妥当性においては先行研究にくらべ、十分な値が得られていると考える。

4. 今後の課題

本研究では、データに基づいた自己肯定感の定義設定を行い、その定義に基づいて大学生版自己肯定感尺度が作成された。しかし、研究 1 の調査においては得られた自由記述の解釈において調査者側と調査協力者側において理解に不一致が生じている可能性が指摘できる。そのため、今後の課題として、半構造化面接を用いて、得られた記述について調査を行う必要性が指摘できる。

また、研究 1 の結果から、本研究で得られた自己肯定感の概念は、Rogers (1951, 1961), Rogers&Dymond (1954) に依拠する点が多く見られる。そのため、自己肯定感の概念においては、これまで Rogers (1961) によって指摘されてきた「十分に機能する人間」との関係性が推察される。Rogers (1961) との関係性が指摘された場合、対象の自己肯定感の向上においてカウンセリングの知識が有効に働く可能性が示唆されると考えられる。そのため、今後の調査によって自己肯定感の性質が明らかにされ、関連性を明確にすることが課題と言える。

尺度作成においては予備調査の段階で質問項目が少数であった点が問題点として指摘できる。その結果、累積寄与率が 50% に満たない状態が引き起こされたと考えられるため、今後、新たに質問項目を増やした調査を行う必要性が指摘できる。また、研究 1 では、自己肯定感の構成要素として 4 つのカテゴリーが得られたが、因子分析の結果 2 因子が示された。この差異についても、予備調査段階での質問項目の少なさが影響した可能性が考えられる。

近年、自己肯定感子どもたちの教育において重要な概念となっている。そのため、今後は自己肯定感の構成概念を明らかにした上で、自己肯定感の向上に関連する要因の特定、具体的な指導方法やプログラムが作成されることが望まれる。

【引用文献】

※文献挙示の方式は、日本心理学会『心理学研究』の方式に準じている。

- Bandura,A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
- Baumeister,R.F. (1998). The self. In D.T. Gilbert,S.T.Fiske, & G.Lindzey (Eds.), *The Handbook of Social Psychology*, 4th., Vol.1. New York: McGraw-Hill,
- 榎本 博明(2000). 自己に関する研究動向 —研究文献の推移— 自己心理学研究, 1, 85-93.
- 江角 周子・庄司 一子(2012). 中学生の自己肯定感とピア・サポートとの関連の検討 日本教育心理学会総会発表論文集(54), 765.
- 樋口 善之・松浦 賢長(2002a). 自己肯定感の構成概念および自己肯定感尺度の作成に関する研究 母性衛生, 43(3), 500-504.
- 樋口 善之・松浦 賢長(2002b). 新たに作成した自己肯定感尺度の妥当性と信頼性に関する研究 母性衛生, 43(4), 505-512.
- 平石 賢二(1990). 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅰ) —自己肯定性次元と自己安定性次元の検討— 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 37, 217-234.
- 久芳 美恵子・斎藤 真沙美・小林 正幸(2006). 小学生の自己肯定感と人とのかかわりとの関連について 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 41, 13-24.
- 久芳 美恵子・斎藤 真沙美・小林 正幸(2007). 小, 中, 高校生自己肯定感に関する研究 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 42, 51-60.
- 星野 命(1970). 感情の心理と教育(二) 児童心理, 24, 1445-1477.
- 星野 命(2000). わが国における「自己」の心理学研究の私的回顧40年と将来展望 自己心理学研究, 1, 1-12.
- 岩永 定・柏木 智子・藤岡 恭子・芝山 明義・橋本 洋治(2007). 宮城県におけるプロジェクト・アドベンチャーの取り組みと課題 —子どもの自己肯定意識の向上に着目して— 鳴門教育大学研究紀要, 22, 37-50.
- 梶田 叡一(2000). 自己意識の心理学 東京大学出版会
- 川喜多 二郎(1996). 川喜多二郎著作集 第5巻 KJ法 —渾沌をして語らしめる— 中央公論社.
- 川崎市・川崎市子どもの権利委員会(2008). 川崎市子どもの権利に関する実態・意識調査
- 松井 賢二・奈良井 啓子(2001). 中学生の学校適応と進路(キャリア)成熟, 自己肯定感との関係 新潟大学教育人間学科紀要, 3, 363-373.
- 文部科学省(2006). 平成18, 19年度児童生徒の心に響く道徳教育推進事業実施要項 文部科学省 <http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/0702061/006.htm> (2014年11月28日)
- 文部科学省(2007). 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会(第20会(第3期第6会)) 議事録・配付資料 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryu/05081101/007_1/003.htm> (2014年11月28日)
- Carl R.Rogers. (1961). *On Becoming a Person: A Therapist's View of Psychotherapy*. Houghton Mifflin Company. (諸富 祥彦・末武 康弘・保坂 亨(2005). ロジャーズ主要著作集3 ロジャーズが語る自己実現の道 岩崎学術出版.)
- Rogers,C.R. (1951). *Client-centered therapy*. Boston: Houghton Mifflin.
- Rogers,C.R., & Dymond,R.F. (1954). *Psychotherapy and personality change*. Chicago: University of

Chicago Press.

- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent child*. Princeton: Princeton University Press.
- 斎藤 富由起 (2007). 中学生における「居場所感」の構成要因と自己肯定感の関連性 子どもの権利研究, 11, 87-94.
- 杉本 希映・庄司 一子 (2006). 「居場所」の心理的機能の構造とその発達的变化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- Suzan, Hater. (1996). Historical roots of contemporary issues involving self-concept. In Bruce, A. Bracken (Ed.), *Handbook of Self-concept*. 1st ed. John Wiley & Sons, Inc, pp1-37.
- (ブルース, A. ブラッケン. 梶田 叡一・浅田 匡 (監訳) (2006). 自己概念研究ハンドブック 金子書房)
- 多田 玲子・蛸崎 奈津子・石井 トク (2007). 親との関係と自尊感情, 自己肯定感との関連 母性看護, 38, 53-55.
- 高垣 忠一郎 (2004). 生きることと自己肯定感 新日本出版社
- 田中 道弘・上地 勝・市村 國夫 (2003). Rosenbergの自尊心尺度項目の再検討 茨城大学教育学部紀要, 52, 115-126.
- 田中 道弘 (2005). 自己肯定感尺度の作成と項目の検討 常盤大学人間科学論究, 13, 15-27.
- 田中 道弘 (2008). Rosenbergの自尊心尺度をめぐる問題と自己肯定感尺度の作成と項目の検討, 博士論文
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

謝辞

論文の完成にあたり、調査にご協力くださった調査協力者の皆様に心より感謝申し上げます。また、本研究のために、法政大学人間社会研究科の末武康弘先生、千里金蘭大学生生活科学部児童学科の斎藤富由起先生、淑徳大学こども教育学科の守谷賢二先生には、貴重な時間を割いて調査、分析にご協力頂きましたことに感謝いたします。

(受理 平成26年11月29日)